

今年はコロナ禍という新しいタイプの災難、試練の中を私たちは歩んでおります。新型コロナウイルスという目には見えない、そして進み具合によっては死をもたらすようなウイルスと戦っています。戦うと言っても目には見えないわけですから積極的に何かと戦うというよりも、避けたり除菌したりして体内に入らないようにしているわけです。そうやって半年が過ぎました。お一人お一人そのような戦いはいつ終わるか不安を覚えながら日々過ごしておられると思います。教会や個人の信仰生活において活動自体ずいぶん減りました。信仰者としても毎日、「これで良いだろうか？」と自問しつつ一日一日過ごしておられることかと思えます。そんな中、何によってクリスチャン生活というものが支えられているのでしょうか？ 神様が今の信仰者の姿を見た時に生ぬるいとおっしゃっているのでしょうか？ それともそれで十分とおっしゃっているのでしょうか？ 今日はキリストの弟子、それも愛弟子ともいふべきペテロの歩みを通してクリスチャンを支えてゆくものは何であるのか、そして神は私たちに何を期待されているのかを見てゆきたいと思えます。

今日の場面ですがイエスは弟子たちとの食事を終えて、ゲツセマネの園に向かいました。イエスは、早い時期から、ご自分が苦しみを受けて死ぬことを弟子たちに予告していましたが、ゲツセマネへの道で、そのことをはっきりと語りました。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる。』と書いてあるからです。」マタイ 26:31 と言われました。羊飼いであるイエスが打たれ、イエスに従ってきた弟子たち、羊の群れが散り散りになるということです。これを聞いたペテロは、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」マタイ 26:33 と言いました。ルカの福音書では「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」と言っています。その時のペテロの気持ちは嘘偽りの無いものだったでしょう。実際、ペテロは、ゲツセマネで、イエスを捕まえようとした兵士に刀で切りかかり、その耳をそぎ落としました。イエスにいさめられてペテロは刀を収めていったん退却しましたが、その後イエスの後を追って、大祭司公邸の庭先にまでもぐりこみました。ほかの弟子たちが逃げ隠れていたのに、ペテロは、こっそりとでしたが、イエスの最期を見届けようとしたのです。しかし、ペテロの勇気もそこまででした。彼は、この大祭司の家の庭先で、三度もイエスを否定してしまったのです。

イエスは、ペテロのそんな弱さをあらかじめ知って、ペテロに「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われました。その主イエスのことばに込められた神のみこころは何でしょうか？

イエスのおことばにある第一の神のみこころは、「イエスは私に信仰を求めておられる」ということです。イエスは、私たちに数多くのことを教えてくださいましたが、その中でいちばん大切なことは何でしょうか。それは、ひとこと言えば「信仰」です。イエスは、神が私たちの父であり、この天の父に信頼するよう教えられました。また、ご自分を救い主、また主として受け入れ、従うよう、求められました。

しかし、神の民と呼ばれる人々はキリストを受け入れず、父なる神の愛の招きを退けたのです。イエスは、「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。」マタイ 17:17 と言って、人々の不信仰を嘆きました。イエスは、何度も、「信仰の薄い者たちよ。」と言って、弟子たちの不信仰をいさめています。イエスは、復活を信じなかった弟子たちに対して、「彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。」マルコ 16:14 のです。しかし、一方、イエスは、しもべのいやしを願ったローマの百人隊長の信仰を見て、「わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことがありません。」マタイ 8:10 と言ってそれを褒め、

彼のしもべをいやしました。「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び続けた盲人の乞食に、イエスは、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」ルカ 18:42 と言われ、彼をたちどころに見えるようにされました。

イエスはペテロに「あなたの知恵がなくならないように。」「力がなくならないように。」「権威がなくならないように。」とは言われず、「あなたの信仰がなくならないように。」と言われました。イエスは、私たちの知恵や力を必要とはされません。私たちは「奉仕」を、自分の力でイエスを助けていることだと思いがちですが、それは間違いです。イエスは私たちの手助けがなければ何もできないお方ではありません。イエスが私たちに奉仕の機会を与えてくださるのは、私たちがそれによって私たちがイエスに力を貸すためではなく、イエスから力をいただくためなのです。同じようにイエスは、どんな人間の権威も必要とはされません。イエスは、天においても地においてもいっさいの権威を持っておられるお方です。イエスは、私たちの持っているどんなものも必要とはされません。イエスはすべてのものの所有者であり、主であるからです。イエスが、私たちに求めておられるもの、それは信仰なのです。

イエスは私たちに信仰を求められるのは、信仰だけが、私たちがサタンの手から救い出すことができるからです。イエスは、「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。」と言われました。ペテロは、試みる者、つまり、サタンの手の中でもてあそばされ、ふるいにかけて地に落ちてしまうというのです。ペテロは、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」マタイ 26:33 と言いました。いかにもペテロらしい発言ですが、そのことばは嘘ではありませんでした。しかし、彼は自分のことばを守ることができませんでした。私たちはサタンの存在やその巧妙な手口について知らないことが多いので、聖書によって、サタンの策略を見破ることができるほどの知識を持つことができたらと願います。しかし、どんなに知識を蓄えたとしても、知識でサタンに勝つことはできません。霊の世界のことは、サタンのほうが良く知っていて、人間の知識はサタンにはかないません。人間のどんな熱心、知恵、知識、また力も、サタンの試みには弱く、無防備です。ですから失敗から立ち上がらせることができるのは信仰だけです。信仰をなくしたら、他のどんなものがあったとしても、ほんとうの勝利も解決もありません。ですから、イエスは「あなたの信仰がなくならないように。」と、ペテロに言われたのです。

第二の神のみこころは、「イエスが私のために祈ってくださる」ということです。

私たちは、「主イエスの御名によって。」と言ってイエスに祈ります。イエスは私たちの祈りを聞いてくださる方、祈りの対象です。しかし、イエスは同時に、祈るお方、しかも私たちのために祈ってくださるお方です。イエスは、その忙しいお働きの中でも静かな場所に退き、たえず祈っておられました。イエスは弟子たちに祈りを教え、弟子たちといっしょに祈りました。ゲッセマネの園に向かう前、イエスは残していく弟子たちのために長い祈りをささげられました。私たちはイエスの祈りの姿から、イエスが祈りについて教えたことから、多くのことを学び、励ましを受けます。しかし、それにもまさって、私たちを励ますのは、イエスが、天に帰られた今も、私たちのために祈ってくださっているということです。

では、イエスが祈ってくださるのなら、私たちは祈らなくて良いのでしょうか。そんなことはありません。イエスは、ゲッセマネの園で眠ってしまった弟子たちに「誘惑に陥らないように祈っていないさ。」ルカ 22:46 と言われました。祈りなしには、誘惑から守られることも、そこから救い出されることもありません。私たちは、疲れ果てたり、大きな失望に落ち込んだりすると、ゲッセマネの弟子たちのように祈らなくなったり、祈る力さえ失くしてしまうことがあります。しかしイエスは、十分に祈ることの

できない私たちの弱さを知っておられます。そして、私たちの不完全な祈りをもご自分のとりなしによって完全なものにしてくださるのです。

イエスのおことばにある第三のみこころは、「イエスは私に使命を与えてくださる」ということです。

イエスは、ペテロに大きな試練を予告しましたが、それだけでなく、「だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言って、試練をへた後のペテロに他の兄弟たちを力づけるという使命を与えました。大きな試練や苦しみを体験して、そこから立ち直った多くが、「私は試練を受けるまでは、他の人の苦しみが分かりませんでした。試練のおかげで、やっと他の人の弱さや痛みを理解できるようになりました。私に試練が与えられたのは、同じ試練に遭っている人々を助けるためだと分かりました。」と言うのを、みなさんも聞かれたことがあるでしょう。神は、私たちに無駄な試練をお与えになることはありません。どの試練にも必ず目的があります。どの試練にも、それによって神のみこころを成し遂げるといふ使命が含まれているのです。

「もしも私が苦しまなかったら」という水野源三さんの詩がもとになった賛美があります。

もしも私が苦しまなかったら

神様の愛を知らなかった

多くの人が苦しまなかったら

神様の愛は伝えられなかった

もしも主イエスが苦しまなかったら

神様の愛は現われなかった

源三さんが小学四年生だった時、源三さんのいた長野県埴科（はにしろ）郡坂城（さかき）町に集団赤痢が発生しました。1946年8月、敗戦からやっと一年が過ぎた時でしたら、薬もなく、十分な治療が受けられず、赤痢にかかった源三さんは、脳膜炎を起こし、脳性麻痺のため体の自由を奪われてしまいました。身動きひとつできないからだになり、自宅の六畳の部屋に寝かされたままになってしまいました。

そんな源三さんが聖書に出会ったのは、1949年、12歳の時でした。聖書と教会の牧師の導きによって源三さんは真剣に信仰を求め、翌年1950年12月、洗礼を受けました。源三さんは、この神の愛、救いのよろこびを詩にすることによって、人々に伝えました。母うめじさんが「アカサタナ…」と五十音の最初を読みあげると、源三さんが「ナ」のところで瞬きをします。すると「ナニヌネノ…」と続けます。源三さんが「ノ」のところで瞬きをして、「野原」の「野」という文字を選ぶのです。とても時間がかかり、忍耐のいるやり方ですが、そんな方法で、源三さんは数多くの詩を作りました。これらの詩集は、多くの人々に慰めと励ましを与え、神の愛を知らせるものとなりました。試練は、使命を妨げるものだと考えてしまいがちですが、そうではなく、試練は、かえって使命を強めるものなのです。ですから、試練を与えられたときには、イエスのおことばを握り締めながらそれに耐えたいと思うのです。屈辱を受けた時にはどれほど主イエスは私のために屈辱に耐えて下さったことか。孤独を感じた時に主イエスは父なる神様に見捨てられるという孤独の極みを経験されたことを。罪に苛まれた時に私が受けるべき罪の罰を身代わりに受け、代わりに赦しと平安を与えてくださったかを。

「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」主イエスが私の信仰を心にかけて、私のために祈り、私に使命を与えてくださっています。そのことを覚えながら、この週も主イエスに従い続けましょう。